

# 東京バッハ合唱団 月報

[第531号] 2006年9月号 Web版

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732  
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.531

September 2006

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 平和の礎を築こう！

《マタイ受難曲》をいま歌う意味を考える

藤田 正記(団員:バス)

東京バッハ合唱団は、第100回定期演奏会および創立45周年を祝して《マタイ受難曲》を演奏することになりました。

1962年創立以来、これまでバッハの作品を、とりわけ教会カンタータを中心に150曲以上も演奏してきた東京バッハ合唱団にとって、第100回目の定期演奏会を記念して、団員の熱い思いをもって、バッハのこの最高傑作を選曲したことは、いわば当然のことであろうと思われます。

\*: 教会カンタータは現存193曲中の117曲。その他は、世俗カンタータ2曲、モテット6曲、ミサ・マニフィカト4曲、受難曲・オラトリオ6曲、宗教的リート・アリア16曲、4声コラール3曲を演奏。

私は、2003年6月に入団し、まだ3年余しか在籍していませんので、合唱団として、今回《マタイ受難曲》をとりあげた歴史的経緯や演奏上の位置付けを述べることはできません。しかし、私なりに、今回この偉大な作品を歌う意味を考え、私はどのような気持ちを込めて歌い、公演で聴衆の皆さまにアピールしたいのかを記したいと思います。

《マタイ受難曲》は、救世主イエスが十字架の上に磔刑を受けることになり、その受難を劇的に唱いあげ、終曲の憩いの合唱において復活の希望を託すのですが、イエスの時代と21世紀に入った今日の政治状況は、本質的には何ら変わっていないと言ってよいでしょう。

祭司長らの支配者層が群衆と一体になって、平和の君イエスを処刑したと同様に、超大国アメリカおよび同盟国は、国際テロ組織から国民をまもり、平和と安全を築くという名目で、無実の多くの市民を殺戮しています。イラク戦争、イスラエル-パレスティナ・レバノン戦争、世界各地で多発している民族紛争を見よ。磔刑の槍にかえて、ミサイルや爆撃機という“大量破壊兵器”によって、無差別に多数の市民を殺傷し、核兵器の開発は、人類を滅ぼそうとしています。その根底にあるものは、「汝に敵する者は死せ！」(《マタイ受難曲》45b.合唱「十字架につけよ!」)ということです。

日本で今行なわれていること(イラク戦争への自衛隊派遣)、また行なわれようとしていること(集団的自衛権の行使による軍隊の派兵を可能にする憲法改定、等)を目の当たりにして、今こそ私たち市民は、世界の人々と非暴力の

連帯を強め、真の平和を築きあげること、そのために私たちが今できることをしようではありませんか。

東京バッハ合唱団は歌います。

人よ なが罪に 泣け

↓

われらが ため 主は  
とりなしと なり

↓

われらが ために  
おのが 身 献げて  
重荷を 負いたもう  
十字架の 上に

《マタイ受難曲》29.コラール

私は、このメッセージを確信して歌おうと思います。

《マタイ受難曲》の練習をはじめから、私は 東松山市にある丸木美術館で、丸木位里・丸木俊夫妻が描いた「原爆の図」を見、 岩波ホールで、映画「紙屋悦子の青春」(黒木和夫監督)を見、 NHK スペシャル 8.11 放映「満蒙開拓団はこうして送られた」、8.11 放映「日中戦争」を見、 松浦喜一著「戦争と死 生き残った特攻隊員、82歳の遺書」を読んで、市民ひとりひとりが平和の礎を築くことに意を固め、思いを同じくする者と共に(私たちの場合、合唱を通して)働きかけることの大切さを自覚しました。

私たちは、これから演奏会までの6ヵ月間、《マタイ受難曲》のテキスト(大村訳)を深く読み込み、ドラマティックに歌い、演じることによって、真の平和、憎しみではなく愛と和解の大切さを、聴衆の皆さまの琴線に訴え、合唱したいと思います。

(追記)

来年の私たちの《マタイ受難曲》公演のあと(6月) 松山バッハ合唱団の演奏会での指揮をとるH.M.ポイアーレさんとは、以前所属していた合唱団でモーツァルト《レクイエム(レピン版)》を演奏したことがあり、またその時、橋本眞行さんと知り合い、同郷のよしみでもって松山での同曲演奏会に参加させていただいたことがあります。今回ふたたび共演できることを楽しみにしています。

FINE

## 受難曲と美術作品

白木 博也 (画家・後援会員)

### ゴルゴタへの道行き



【図1】 ジョット・ディ・ボンドネ (1266-1337)

パドヴァ、スクロヴェーニ礼拝堂

群衆のある者が、杖でキリストを押しつつ、ゴルゴタに向かわせている。左端に、聖母マリアが悲痛な顔でこれを見守る。



【図2】 ドウチョ・ディ・ブオンセーニャ (1255/60-1315/18)

シエナ、大聖堂付属美術館

キリストは手を結わかれ、群衆のひとりが十字架をもち、他のひとりは別れを惜んでいる。左側には、聖母が悲しみつつキリストを注視する。

### 《マタイ受難曲》の関連テキスト

56. レチタティーヴォ (バス )

十字架 強いらるるも よし

わが 体(からだ)に

いやます 痛みに

魂は きよめらる

57. アリア (バス )

来たれ 甘き 十字架よ

負わせたまえ 主イエス そを われに

われに 重荷 耐えがたくならん とき

来たらば

み力 われに 添えたまえ

### 参考：聖書のテキスト

「ヨハネによる福音書」19：16,17

そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ(ヘブル語ではゴルゴタ)という場所に出て行かれた。

「マタイによる福音書」27：31,32

...それから十字架につけるために引き出した。彼らが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に負わせた。(マルコ15：21、ルカ23：26)

### <チラシの図柄>

なお、今回のチラシには、左に掲出したドゥッチョの「ゴルゴタへの道行き」を使わせていただきました。白木氏が【図2】の解説にお書きになったように、この画面に登場する30人前後の人物には、さまざまな立場と役割があり、さまざまな心理と感情が交錯しています。十字架を負わされているのは、クレネ人シモンでしょうか。

いづれど豊富な形式の音楽を連ねつつ、重層的・立体的にドラマを展開するバッハの技量を伝えるにふさわしい図柄と思われま。



## 児童合唱の練習、始まる

8月26日から、児童合唱の世田谷会場での練習が始まりました。指導はピアニストの内山亜希先生(写真・上)。

冒頭の合唱 来たり歎け 娘らよ とコラール  
おお きよき子羊 を、大人の団員と合わせて  
みました。ピアノ金沢亜希子さん、フルート助  
奏は平田輝子さん(写真・下)。



写真：松尾茂春さん提供

児童合唱団参加者 [8月26日現在、50音順]

- |              |              |
|--------------|--------------|
| ・荒井美咲さん(小1)  | ・石田敦子さん(小3)  |
| ・石田晴子さん(小1)  | 宇治田 祥さん(中1)  |
| 宇治田 万菜さん(小5) | ・岡本未玲さん(小3)  |
| ・米谷由希さん(小5)  | 齊能菜々子さん(小5)  |
| ・菅谷基樹さん(3歳)  | ・関 まり子さん(小3) |
| ・丹治 尊さん(小2)  | ・野口初音さん(小5)  |
| ・平岡拓也さん(小5)  | 室田悠介さん(小5)   |
| ・室田真由さん(5歳)  | ・山口そな恵さん(小6) |
- (・印：8月26日出席者)

### 児童合唱メンバー募集中

今回の公演では、混声合唱団のメンバーが大勢になりそうなので、バランス上、児童合唱の数も増やせそうです。小学生から高校生くらいの、歌の好きなお子さんをご紹介します。

### 募集要綱

合唱経験の有無を問いません。原則として小学生以上(3月3日の抜粋公演までは、学齢前でも参加できます)参加費として3,000円をお納めいただきます。楽譜はこちらで用意します。

- <指導> 光野孝子(声楽家) 内山亜希(ピアニスト)  
<練習日程> 原則として、毎月第1,3土曜日(2006年8/26、9/2,16、10/7,21、11/4,18、12/2,16、2007年1/20、2/3,17) 午後2時30分~3時15分(45分間)  
<練習会場> 世田谷中央教会(世田谷区桜新町 1-14-22、TEL03-3428-2388、東急田園都市線「桜新町」駅下車4分)  
<直前のリハーサルと本番> (詳細は案内チラシ参照)  
2/24土(リハーサル、世田谷中央教会)  
3/3土(特別演奏会：抜粋、世田谷中央教会、入場無料)  
3/10土(リハーサル、大久保駅下車会場)  
3/20火(リハーサル、杉並公会堂リハーサル室)  
3/21祝(第100回定期演奏会、杉並公会堂大ホール)  
<参加申込み・問合せ> 合唱団事務局

中野会場(更生教会、中野区若宮2-1-15)での練習も現在、立ち上げの準備中です。詳細は近日中に発表します。



## 灼熱の強化練習、終わる

8月の4回の土曜日、午後1時から7時までの6時間、を《マタイ》の集中強化練習にあてました。先月号月報(第530号)では、第1回の様子をお伝えしましたが、26日は最後の練習が、途中に、児童合唱団の初練習をはさみ、大村恵美子、橋本眞行、佐々木まり子の3先生のご指導で、はげしく、つつがなくなされました。この日は、6名の見学者をふくむ、約80名の団員が参加されました。

なお、練習の開始に先立ち、4回のうち3回以上の出席者に“精勤賞”の賞状と賞品(CDラック)が授与され、51名の方が受賞対象となりました。また出席者全員に“参加賞”(A池田孝子さん手づくりのフルーツケーキ、元団員眞崎みよ子さんから差し入れの白水堂謹製カステラ)が配られました。

### 新入団員(8月)

#### <ソプラノ>

- 秋山潤子さん(合唱団月報等を見て)  
秋山文子さん(朝日新聞8.18記事を見て)  
関 順子さん(団員の紹介)  
平 博子さん(朝日新聞8.18記事を見て)  
橋本みどりさん(後援会員・元団員)  
森 千代子さん(朝日新聞8.18記事を見て)

#### <アルト>

- 伊藤玲子さん(朝日新聞8.18記事を見て)  
村野井喜美子さん(朝日新聞8.18記事を見て)

#### <バス>

- 山下節夫さん(団員の紹介)

この夏、合唱団の周辺では、沖縄の話題が飛びかいました。この機会に、団員の真鍋さんに、関連の話題を寄稿していただきました。

## essay

# 目取真 俊 の小説世界

真鍋 孝子 (団員 : アルト)

1997年に中篇小説『水滴』で芥川賞を受賞した沖縄出身の作家目取真俊は、1995年に受賞したやはり沖縄出身の又吉栄喜とは作風がまったく異なり、濃密なアニメイズム空間をその小説世界に構築している。作品すべてにわたり繰り返し現れる熱帯魚のセラピアはじめ、蟹、ヤドカリ(アーマン)、コウモリ、ハブ、それにアダマンや福木といった植物にいたるまで、さらには風や水、空気にまでも精霊が躍動しているのだ。

目取真は戦争を知らない世代であるが、母方のおばあであるウタをはじめ多くの親族から悲惨な経験を聞き、おそらくリアリティよりリアリスティックな、沖縄人の怒りや悲しみを書き記してきた。その世界は呪文や祈り、号泣や悲鳴、阿鼻叫喚に満ち満ちていて読者の胸を引き裂いてやまない。そう、目取真の文体はそれ自身が美しい剣=凶器である。

初期の作品から、風が物語り、海が泣き、マブイ(魂)や魔物(マジムン)が跳梁する、それでいて極彩色のデイゴの花のような、また月桃の香りのような有機性は顕著である。『平和通りと名付けられた街を歩いて』では、認知症のウタおばあが来沖した皇太子夫妻の車のフロントガラスに自らの汚物をぬりたくり、「手形」をつける。孫のカジュはおばあをつれてヤンバルへと逃避行をする。『風音』のキラ少年は風葬場によじ登り、セラピアを入れたピンを特攻隊員の頭蓋骨の脇におくのだが、読者は彼の息遣いやすりむいた血のにおいすら感じるができるだろう。有機的世界に加え、もうひとつの特徴はプリミティブな暴力性である。目取真のバイオレンスは邪悪なものでなく、いわば子供の無邪気さがもたらすものようである。「雛」では想像妊娠した美しい語り手の妻が錯乱の末に小鳥を殺す。また「蜘蛛」では、昆虫をバラバラに切り裂く語り手がいる。それらはピュアな暴力である。だが、沖縄は1609年をはじめとして今にいたるまで、そして今後いつまで続くか誰も知らない圧倒的な巨大な暴力にさらされている。

最新の長編小説『虹の鳥』はそれまでの作風が一変している。アニメイズムの範疇であった目取真の暴力はより明白になり、凶暴なさまをさらす。作者と一体化していると思われるヒーローのカツヤは家庭、学校が崩壊し、共同体の消滅した沖縄でイジメ、暴力団の搾取という暴力の洗礼を受け、同じく凌辱され暴力の餌食となっているヒロイン、マユとともに「やられる犠牲者」から「報復するもの」へと化す。やがて彼らの暴力は、ヤンバルの精霊・虹の鳥の導きにより「奴ら」にむかってゆく。かれらが一路むかう

のは、ウタおばあとカジュと同じヤンバルの原生林である。

それまでの詩的な呪術的世界は沖縄のステレオタイプ観を切り裂くように虹の鳥を現出させた。目取真の悲壮な意図がそこには感じられる。極限までの怒りや悲しみを内地の私たち(ヤマトンチュー)はいかに受けとめるのだろうか。沖縄を考えるとときに安易な共感はいけずあってはならぬことだと、目取真の小説は叫んでいるように思えてならない。

・ここで取り上げた目取真俊の作品

『水滴』文芸春秋(1997年)

『魂込め』朝日新聞社(1999年)

『平和通りと名付けられた街を歩いて・目取真俊初期短編集』影書房(2003年)

『風音 The Crying Wind』リトル・モア(2004年)

『虹の鳥』影書房(2006年)

## 「ラジオ深夜便・こころの時代」に出演

NHKラジオ第1放送、およびFM放送  
10月3日(火) 4日(水) 午前4時05分~50分

題名:「バッハ合唱団の45年」(2回)

出演:東京バッハ合唱団主宰者 大村恵美子

インタビュアー:鈴木健次

「ほぼ半世紀にわたって東京バッハ合唱団とともに歩んできた大村さんの音楽人生とバッハの魅力について、演奏の録音を交えて語ってもらう」

## 《マタイ受難曲》チケット予約受付開始

今回の定期演奏会《マタイ受難曲》公演は、早くからいろいろな媒体にとり上げられて、すでにチケットの問合せが寄せられています。

9月1日よりチケット予約を受け付け(事務局) 中旬より発売を開始します。

通常ですと3ヵ月前からの発売ですが、このたびは売り出しを半年前に前倒しすることとし、会場ホール(1190席)をピッタリ満席にすべく、担当者が智恵をしぼっています。

第100回定期演奏会 創立45周年記念公演

・日時:2007年3月21日(水・祝日)

午後5時開演(8時40分終演予定)

・会場:杉並公会堂(本年6月に新装開館)

(JR中央線・地下鉄丸ノ内線「荻窪」下車)

・入場料:全席自由席3,500円(当日4,000円)